

KCDラボ
で検索!



研究所
KOBE北・コミュニティデザインLab.

社会福祉法人陽気会

巻頭言—“私たち”という共同性の感覚—

個々人の自由を行動原理の基本におく考え方をリベラリズムといいます。政治哲学者のジョン・ロールズが1971年に『正義論』という本のなかで、その思想を原的に整理しました。自分の属性や能力が一切わからないという「無知のヴェール」のもとに覆われた「原初状態」に置かれた場合、まず人は自由であることを求めます。すると、自由な競争のもとでの競争において、うまくいく人とそうでない人とに分かれます。しかし、「無知のヴェール」のもとでは自分が優位に立てるのか、不利な立場に置かれるのかわかりません。そこでそうした社会的・経済的不平等については、①それらの不平等がもっとも不遇な立場にある人の利益を最大化すること（格差原理）、②公正な機会の均等という条件のもとで、すべての人に開かれている職務や地位に付随するものでしかないこと（機会均等原理）という2つの条件を満たすものでなければならないとしています。

つまり、自由な競争のもとでは必ず格差が生じ、自分が不遇な立場になる可能性もあるので、社会としてその格差を是正するため、所得の再分配の制度を含めた措置をとるべきであるということに人々は合意します。こうして自由な競争のもとで、社会的な平等を保障しようとする福祉国家政策が合理化されます。このようにリベラリズムの思想には、単なる自由主義ではなく、社会的な平等を求めるといった側面もあるのです。

さて、こうしたリベラリズムに対して、反論が出てきます。そのひとつがコミュニタリアニズムという思想です。代表的な論者のマイケル・サンデルは、「無知のヴェール」についてそれが現実的にはあり得ないという観点から批判します。当然といえばその通りなのですが、私たちは常にどこかの国の、どこかの地域で、親から生まれます。つまり常に、既に「状況づけられている」のです。そして、格差を是正するための所得の再分配政策が可能となるためには、「私たち」という仲間意識や共同性がなければ、成り立たないということを主張します。自分がうまくいか、うまくいかないかはわからない。だからうまくいかない場合の備えとして、あらかじめ税金を納め、それをプールし、そして不遇な状況に陥った際には、それを財源に生活を保障するような仕組みは、地球で暮らしている70億人の人類全体に適用することは不可能で、実際的にも、国家単位でそうした制度は運営されています。



セッションルーム内のスヌーズレンルーム

また、サンデルはトロッコの例を出して、自分にとっての身近な人の存在の優位性を指摘しています。ブレーキの壊れたトロッコの先には、5人の作業員が作業をしています。いま自分が運転士だとして、このまま行くと5名をひいてしまいます。唯一、レールを右に切り替えることができますが、その先には1名の作業員がいます。さて、直進して5名をひくのか、右にレールを切り替えて1名をひくのか？

この思考実験では、自然のままにまかせるのか（直進）／意思を働かせるか（レールを切り替える）という観点と、もうひとつは、5人にするのか／1人にするのかという観点があります。後者の数で判断する思想を「最大多数の最大幸福（最も多くの人々が幸福になるのがよい）」という功利主義の思想に関連づけると、5人より1人が「まし」ということで、1人を選ぶこととなります。しかし、その人がもし自分の知り合いであったり、大切な人だったとしたら、それでも1人を選ぶでしょうか。

サンデルはこのような問いを投げかけて、人の重みが数では測れないことを指摘します。そして、自分とその人との関係、すなわち家族や職場の同僚、幼馴染や隣の住民といったことが意味をもつとして、私からみて、「私たち」といえるような関係、すなわち「コミュニティ」を重視するのです。だからコミュニタリアニズムとか地域共同体主義といわれます。

さて、前回の話に戻すと、私的な利害を追求することで、公共性を掘り崩していく事態を避けるためには、つまり私的な利害を超えて、他者のことを思いやるためには、「私たち」を実感することのできる関係を、いかに豊かにつくっていくのかということが重要になります。

それは公共政策の課題でもあります。実は私たち一人ひとりが実践することで、変えていくことのできる課題でもあるのです。

KCD ラボ代表 松端克文

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋 今月のテーマ：個別支援計画（7）

◆“支援”するということ

個別支援計画は、困難な状況に置かれている個人を支援するための計画である。「支援」するための計画なので、必然的に支援者目線からの発想に陥る。このことに関する現場での葛藤は、たとえば計画の主語をめぐる出てくる。具体的には、計画の主語を誰にするのかということが課題となり、「本人中心計画」として、計画の主語を「本人」にして作成しているところもある。

そうしたことを大切に、地道に実践するという姿勢は極めて大切である。しかし、「個別“支援”計画」ということからすれば、理論的な整理が必要となる。

本人が主語である計画とは、どのようなものであろうか。たとえば私自身がなんらかの他者からの支援が必要な状況にあるとして、私を主語として計画を作成するとすれば、次のようになる。

私は、来年の3月末には、いま暮らしている入居施設（入所施設支援）から出て、アパートでの一人暮らしを始める。

そのために通所施設のサービス（就労継続支援 B 型）を週に5日利用しているが、一人暮らしができるように、掃除や洗濯、買い物などができるように、週末にはそのための練習をする。

こうした内容は、どのように支援するのかという“支援”の内容が記載されていないため、「個別“支援”計画」とはいえない。おそらくこれは、「人生目標・設計」とか、「私の夢の実現に向けた行動計画」といった性格のものになる。そこで、“支援”計画として書いてみると、次のようになる。

- ・入居施設から出てアパートでの一人暮らしを希望しているため、本人の意向を確かめながら、年内を目途によい物件を探す。
- ・掃除や洗濯、買い物などができるように、土・日曜日にはそのための練習をしたいとのことなので、グループホームでの体験入居を通じて、そうした家事ができるように支援する。

このように支援計画の主語は、計画書に明記するかはともかくとして、文脈上、支援する人＝支援者となる。

◆“本人中心”であるということ

このことは、“本人中心”の支援の考え方を否定するものではない。“本人”を“中心”に支援するということは、支援の現場における重要な観点である。「本人中心」の対概念は、「専門職（支援者）中心」である。本人中心の支援を大切にすることは、専門職中心にならないようにするということを意味している。支援の現場では、つつい日課やプログラム、支援者の側の都合を優先してしまいがちになる。だからこそ本人を中心にして、支援していくことが求められる。

本人中心の支援は、まずは本人の気持ちや想いを支援者がしっかりと受け止めることが基本となる。日常生活の些細な場面においても、ちょっとした表情の変化やしぐさを含めて、その人（利用者）がどのような気持ちなのかということをごれくらい支援者が汲み取ろうとし、実際にどれくらいその気持ちに伝えることができているのかということが問われるのである。

このことは意思決定支援の考え方とも共通している。

意思決定支援とは、本人に寄り添いながら、その人にとっての「最善の利益」を考え、ある種の選択や決定を支え、それに基づく行動を支援することをいう。

しかし、本人にとっての「最善の利益」が明示されているわけではない。客観的にその内容が確認できるわけではないのである。だからこそ本人を中心に関係者が協議することで、どのようにすることがその人にとってよりよいことなのかということを探っていくことになる。そしてとりあえず当面の方向を確認するという意味で「とりあえずの合意」を重ねながら、そのときどきの状況に応じて、その都度その妥当性について確かめながら、適宜、改めていくというような支援を実践していくことが、本人中心の支援につながるのである。

こうしたことからしても、個別支援計画を作成していく上でのポイントのひとつは、本人を中心に家族や支援者、そのほかの関係者がいかに話し合う機会・協議の機会をもてるのかということにある。

◆計画に基づいて支援するということ

個別支援計画の策定という業務は、ややもすれば形骸化してしまいやすい。日々、具体的な支援を実践しているなかで、個別支援計画に支援のすべてが網羅できるわけではないし、計画通りに支援が展開できるわけでもないからである。

したがって、個別支援計画を作成したから、ただちによりよい支援ができるわけではない。個別支援計画の策定を通じて、よりよい支援にしていこうという支援者側の“意志”が問われるのである。それだけに個別支援計画をよりよい支援にしていくための“ツール（手段）”として捉えることも重要となる。アセスメントをして計画を立て、計画に基づいて支援し、計画に照らして支援内容をモニタリングし、評価して、再びアセスメントをして、計画を立ててという計画策定のプロセスを、“本人中心”という理念を中核に据えて展開することで、なにが本人にとっての幸せであり、その人の人生をより豊かにしていくことになるのかということを真摯に考え、その時点でできることに、精一杯取り組むといった姿勢が大切なのである。

◆本人はいきいきと輝いているか？

困難な状況に置かれている人を支援するということは、その支援を通して、その人がいきいきと輝く存在になっているのかということが重要となる。

換言すれば、支援を通じてエンパワーメントしているのかということが問われるのである。エンパワーメントは、連鎖する。本人が澆測としていけば、そこにかかわる支援者も澆測としてくる。こうしたお互いが“生きる力”を高め合うことのできるような関係は、そうしたポジティブなエネルギーを他者へと“感染”していく。本人中心の支援が展開されるとすれば、そのような支援は、その人だけに閉じられるのではなく、ほかの支援関係においても認められる。

個別支援計画は、個々の利用者の支援のための計画であるが、一人ひとりを中心とした支援を展開できるということは、そのような支援ができる“組織”であるということでもある。

KCD ラボ代表 松端克文

（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科教授）

教えてください！専門職 ～管理栄養士編～

*管理栄養士とは（栄養士との違い）

管理栄養士は、より専門性が高く、健康な人に加え、傷病者など個々のさまざまな症状・体質を考慮した専門的な栄養指導や給食管理を行います。そのため、特別な栄養管理が必要な病院や福祉施設などには、管理栄養士が必要とされています。

栄養士になるためには、大学や短大、専門学校の栄養士養成課程で学び、卒業しなくてはなりません。管理栄養士になるためには、まず栄養士の資格を取得し、その後、国家試験を受け、合格する必要があります。

*陽気会における管理栄養士の仕事

利用者さんに必要な栄養量に基づいて日々の献立を立て、食材の発注や在庫管理をしたり、厨房内業務が円滑になるよう備品の補充や整理をしたり、盛りつけや配膳などの業務に携わることもあります。ほかにも食数の管理や、事業所と厨房の連携を図るための窓口としての役割もあり、細かな仕事も多いです。

また、月1回給食会議を行い、各事業所の職員を通じて利用者さんの食事摂取状況や体重変化などの情報を共有し、食事の内容や量、提供方法などに反映させています。各事業所の会議にも可能な限り参加し、管理栄養士としての目線で現場の課題について考えています。

*仕事をする上でむずかしいと感じること

陽気会には多くの事業所があり、管理栄養士として各事業所の栄養・食事管理にかかわっていますが、事業所によって未就学児から高齢の利用者さんまで、さまざまな年齢の方々が利用されており、それぞれの年齢に合わせた献立を立てることがむずかしいと感じています。たとえば現在、おかば学園、児童発達支援センター（以下、児発）とようき寮では、ベースとなる献立は同じですが、学園の利用者さんは必要量が多いため、メインとなる肉や魚がようき寮より少し大きく、メニューは児発よりも1品多くなっています。また、児発には昼食とは別に、おやつがあります。

ひだまり園とよるこび荘の食事は、現在外部委託をしていますが、利用者さんの年齢や障害の特性に応じて、噛むことや飲み込むことがむずかしい方には食事を細かく刻んだり、汁物にとろみをつけたりするなどの対応をしています。利用者さんの命を預かる責任ある仕事ですので、食事の形態や、食品アレルギーの対応には特に気を付けています。

*仕事をする上で楽しいと感じること

自分たちの作った食事を、「おいしい」と言っていただけたときは、やはり嬉しいです。ほかにも、利用者さんにその日のメニューを聞かれることや、食べたいメニューなどの要望を伝えられることもあり、期待に応えられるようにがんばろうと思います。

毎日の食事を1番の楽しみにされている利用者さんも多いと思いますので、好きなものが食べられるよう、人気の高

いカレーライスや唐揚げは、多めに献立に組み込んでいます。また『春野菜スパゲティ』や『夏野菜カレー』など季節のメニューを取り入れて、季節感を出すことも大切にしています。

朝は牛乳と食パンを提供しているのですが、週に1～2回は、菓子パンやコーヒー牛乳を提供するよう設定しています。利用者さんも毎週楽しみにしてくれているようで、残飯がほとんどなかったり、次のコーヒーはいつ？と聞かれたりすることもあり、こちらも嬉しくなります。

*今後の展望

前述の通り、各事業所にさまざまな嗜好や食事摂取上の課題をもつ利用者さんがいますので、ミールラウンド（多職種による食事の観察評価）や、職員とのコミュニケーションなどで各事業所との連携を図り、個人単位での栄養ケアを充実させ、より利用者さん一人ひとりに合わせた食事の提供ができるような体制づくりに努めています。

また、来訪されるご家族にも食事内容を理解していただけるよう、料理の写真の貼り出しなども考えています。そのほか、まだ構想段階ですが、今春に開設したコミュニティ・サロンの厨房と食堂を使って、利用者の皆さんに満足していただけるようなイベントも開催できればと思っています。

管理栄養士である前に、福祉事業所の職員であるため、病院や学校の栄養士とは異なる点も多いです。たとえば、入所の事業所は家庭に近い役割を果たしており、温かみのある食事を提供することが大切です。そのためにも、まず各事業所の利用者さんに向き合って理解し、私たちのことも知ってもらう必要があると思います。その上で利用者さんにアンケートをとって、そのリクエストメニューを献立に取り入れるなど、皆さんに喜んでいただくためにできることは、まだまだあると思っています。

看護師や各療法士などの専門職とも協力して、利用者さん一人ひとりの個人単位でのサービスの向上に努め、事業所にとって管理栄養士という存在がもっと大きくなるよう、給食部メンバーとともに、がんばっていききたいと思います。



河野さん

いつもおいしい食事を提供していただけていますが、多くの利用者さんの毎食の献立を考えるだけでも、本当に大変なことだろうと思います。そのなかでも「個人単位のサービス」を意識されていることに感銘を受けました。サロンでのイベント開催、期待しています！（編集委員会）

行ってきました！～出張研修の巻②～

8月27日、神戸あゆみの会にて『個別支援計画についての研修会』が実施されました。武庫川女子大学教授であり、KCDラボ代表でもある松端克文氏が講師として依頼を受け、社会福祉法人神戸あゆみの会の理事長はじめ施設長、サービス管理責任者等役職者の方々13名で、なごやかに研修が始まりました。



まず、『個別支援計画について』という講義で、そもそも計画とはどういうものなのかといったことや、アセスメントの捉え方、モニタリングの重要性について話がありました。アセスメントでニーズを考え、目標から逆算していまなにをするのかという計画を立て、実践し、よりよくなっているかどうかのチェックを行う。このサイクルをきちんとおさえて支援を行うことで、それぞれの利用者さんの生活がより豊かになるということでした。目標は「その人にとってどうすることがよりよい状態といえるのか？」という点をふまえて定めることが大切で、計画は、個別の支援計画ではあるが運営によって規定されるものであり、また個別の支援を通じて運営を改善していくものでもあるということを確認しました。



次に、個別支援計画作成時の「本人の意思確認について」では、ことばで意思確認がむずかしい場合や、本人の意思であればなんでもよいのか、という点について話がありました。本人の意思は大切であるが、そのまま捉えるのではなく、「なにがその人にとって望ましいのか＝最善の利益はなにか」を、大きな枠で、メタ的な視点でとらえることが重要であるということでした。伴走するように本人に寄り添って、その意思を汲みとりつつ、本人の最善の利益を検討しながら協議を重ねて作成し、利用者さんがいきいきとして、輝いた目で生活しているかどうかのポイントであるということでした。

続いて、現状の個別支援計画書をふまえた質疑応答が行われました。

- Q. ご家族の意向が強く、利用者さんの思いをこちらが拾いきれていないように思う。
- A. 本人と家族は別。本人の総合的な面を見て判断する。家族の意向も尊重する必要があるが、そこを中心に計画を考えるのではなく、あくまでも「本人にとってよりよい生活」を考えることが重要。
- Q. 記録をとる上でのポイントは？
- A. ケース記録は、事実関係をおさえた「実際の記録（食事摂取量やバイタルなど）」と、自分が利用者さんとかかわってどうであったのかという「エピソード記録」の両方があることが望ましい。生々しいエピソードがある方が支援に役立つことが多い。
- Q. 通所事業所の場合、障害種別がさまざま、将来の夢がある利用者さんもいるが、週5日の1日6時間のサービスで、できる内容が限られていることに葛藤がある。
- A. まずは通所で利用している時間が充実したものになるように、6時間のプログラムを明確にすること。長い目で見た将来については、サービス等利用計画もふまえて、家族とも話し合う機会をもつ。
- Q. 施設での生活が長く、ある程度安定されている利用者さんの場合、「より望ましい状況」が見つけない。
- A. 施設入所が長いと落ち着いてきて、一般的な意欲が低くなりがちなので、できるだけ刺激になるような、本人に興味をもってもらえるようなプログラムを探すことが大切。意欲は人とかかわりが出てくるので、本人が「いきいきとできるなにか」を見つける。
- Q. 特に問題もなく、かかわりを必要としない利用者さんのプログラムがむずかしい。また、かかわりが必要な利用者さんにも、諸事情により明確なプログラムが提供できない状況の場面もある。
- A. 特にかかわりを必要としない利用者さんが、本人自身でなにか自主的に取り組むことがあれば、それが存分にできる時間を保証すること。かかわりが必要な利用者さんの場合は、運営上の改善が必要になってくる。



参加者の方々の意識の高さが強く印象に残った研修でしたが、利用者さんのいきいきとした生活を目指して個別支援計画をたて、そのためにかかわる人たちが支援を通していきいきと働けるように取り組んでいければと思います。

最後になりましたが、貴法人のますますのご発展と皆さまのご活躍を心よりお祈り申し上げます。（編集委員会）

◆神戸常盤大学 見学体験実習

8月20日、21日の2日間にわたって、神戸常盤大学教育学部こども教育学科1回生の総勢95名が見学体験実習に来られ、各事業所リーダー等の案内・説明のもと、それぞれの班に分かれて、順番に見学体験実習を行いました。



神戸常盤大学の見学体験実習の目的は、『障害のある子ども・成人が利用する障害児入所施設・児童発達支援センター・障害者支援施設等における見学体験を通して、利用者のありのままの姿をとらえ、障害関係施設が有する社会的意義・役割と存在価値を理解する。また、保育士資格・社会福祉主事の汎用性と専門性について学び、各施設における保育士・児童指導員等の職域と職務内容を理解する』で、基礎研究演習プログラムの一環としてカリキュラム化されています。



時間は10:00から15:00まで、場所は、おかば学園・児童発達支援センターおかば学園(以下、児発)・放課後等デイサービスおかば学園・ひだまり園・サニーサイド神戸・よろこび荘南館・屋外の庭園です。



両日とも、9~10名ずつで1班から5班に分かれて、それぞれに見学を行いました。2班を案内した児発の児童発達支援管理責任者の足立さんは、「案内中は、皆さんにリラックスしてもらいつつも、ある程度の緊張感が必要だと考えながら説明を行いました。最初は表情の硬かった学生さんも徐々に打ち解けてくれていたようです。施設や障害について、“知ら

ない”ために、“暗い”とか“こわい”といったイメージをもたれるのではないかと思います。見学して、知ってもらうことでそのイメージを変えることができればと思います」と話していました。3班を案内したよろこび荘リーダーの石原さんは、「年齢のギャップを感じる学生さんたちとの、最初の話題づくりに苦心しましたが、各事業所を案内しているなかで、それぞれに特色が見られ、法人内でありながらも知らなかった新たな発見がありました。次の機会には、もっと工夫をしたいと思います」と話していました。



見学体験実習を終えてサロンで休憩後、質疑応答・交流会が始まりました。休憩時は、デザートと飲み物でしばらく歓談。学生さんらしい賑やかなひとときとなりました。学生の皆さんからは「福祉の仕事のやりがいはどこなところですか」、「働く上で大変なところはなんですか」、「福祉の仕事を選んだ理由を教えてください」など、いろいろな質問がありました。ほかにも利用者支援について、職員間のコミュニケーションにおける重要性についてなど、いろいろな話が出ました。学生の皆さんからのそれらの質問に対して、各リーダーたちは自分自身の経験をふまえて、一生懸命に考えながら、真剣に、また楽しく答えていました。



この度、障害児・者施設等を全く知らない学生の方々を迎えるにあたって、各事業所のリーダーたちには伝えたい思いがありました。それは「施設ってどんなところ?」「障害者ってこわい?」など、さまざまな疑問や不安を抱えて訪れるだろう学生の方々に、「ありのままの利用者さんの姿や、施設を見てもらいたい」、「福祉の仕事の楽しさを知ってもらいたい」という強い思いでした。学生の方々の見学体験実習を通して、それぞれの班を案内したり、現場で説明を行うことで、各リーダーたちが、改めて自分自身の仕事に向き合い、普段の業務を振り返り、そのおもしろさを再確認できたのではないかと思います。今後も福祉の仕事を目指す方々が、少しでも増えるよう努力していきたいと思います。(編集委員会)

ちょっといいですか？大西ですけど…

－優しい人になること－

◆福祉で得られるモノ

皆さま、この仕事をしていると、周囲の方々から、「この仕事はどのような仕事ですか？」という質問をよく受けませんか？その答えは、通常「障害のある方々（の生活）を支援することです」となります。ほぼこれが正解かと思います。では、「なぜあなたはこの仕事をしているのですか？」と聞かれると、皆さまのようにお答えになりますか？利用者さんのため、自分のため、お金のため、特に理由なし、なんとなく…、多くの答えが返ってきそうです。いまこうしてこの業界で働いている目的は、人それぞれ違います。必然的に、同じ仕事を同じだけやっても、一人ひとり「得られるもの」は違ってきます。

ただ、この業界で働く私たちに共通して得られるものがあるとすれば、「優しい人」になることができる（できた）ということだと思います。当然、全員が得ているかどうかは別問題ですが。本来、福祉職は、明るくて楽しい人が多く存在する職業ですし、福祉そのものは、明るくて楽しい業界であるべきです。で、誰が、なにがそうさせているのか？間違いなく、障害のある方々が、周囲を明るくし、楽しくし、そして「優しい人」を創り出してくれているのだと思います。障害のある方には、周囲の人を明るく優しい人にしていく力と役割があるのだと思います。

◆優しさを教えてくれるヒト

一方、この仕事に向いているとか、向いてないとか…よく話題になりますし、誰しも一度は考えたことがあると思います。なにをもってこの仕事に向いてないと思うのか、これも人それぞれですが、自分自身が「優しい人」になれているかどうかで判断してみるのもいいかと思います。この仕事を何年やっても、「優しい人」になれない場合は、職員としては向いていないということになるかもしれません。

で、たま～にですが、この仕事をやればやるほど、横柄になっていく人がいます。虐待で問題になる職員がいい例ですね。当然こういう人は、この仕事をすべきではありません。障害のある方々の存在そのものを否定していることになるからです。

人は、本来、困っている人や悲しんでいる人がいたら、なにか役に立つことはないか、なにか助けることはできないかと感じるものだと思います。本能的に優しさをもっているものです。ただそれが、生活環境とかさまざまな要因で、失われていってしまうのだと思います。障害のある方々は、忘れていた優しさを取り戻してくれる存在でもあるように思います。(大)



陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、61年目を迎えています。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしていきやすくなるよう“デザイン”し、陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、みなさまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です
施設・事業所サポーター 年間 10,000 円
個人サポーター 年間 1,000 円

編集委員会：松端 克文(KCD ラボ代表)
朝日 満子(KCD ラボマネージャー)
松端 真美(KCD ラボスタッフ)
大西 博之(法人本部長)

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078 (981) 7271

Fax : 078 (981) 0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email : kcclab@youkikai.or.jp

